

メコン-チャオプラヤ河流域における生物多様性の保全とワイズユース

－第一期事業の成果の発信と活用－

○名執 芳博¹、○市河 三英²、多紀 保彦¹、打木 研三¹、渋川 浩一¹、菰田 誠¹、鹿野 雄一³

¹(公財)長尾自然環境財団、²(一財)自然環境研究センター、³九州大学大学院工学研究院

一昨年の日本湿地学会大会及び学会誌(Vol. 3 No. 1)で、長尾自然環境財団が2006年度から2010年度までインドシナ4カ国(タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム)の現地研究者と共に実施したメコン-チャオプラヤ河流域に生息する淡水魚類の分布実態調査事業について報告した(第一期事業)。

メコン-チャオプラヤ河流域の生物の多様性は世界的に知られており、古くから川のもたらす豊かな自然に支えられて人々が暮らしてきたが、昨今の急激な経済発展や大規模ダム開発、異常気象などにより、大きな脅威にさらされている。この地域の生物多様性を保全するとともに、そのワイズユースにより自然資源に依存した生活を人々が続けられるような取組が求められている。しかし、適切な取組を進める際に必要な同地域の生物基礎情報は断片的であり、調査を進める上で必要な参照用資料も乏しく、調査を遂行できる現地人材も不足している。このような背景のもと第一期事業を実施した。

第一期事業では、4カ国にカウンターパート機関を特定し、当財団研究員と現地研究者が共に野外で採集調査を行い、データを記録し、標本を作成・登録し、標本庫で保管する、という一連の作業を通じて、調査技術や知識の移転を行った。4カ国合計で540種(当流域に生息する魚種のおよそ半数と推定)、235,000個体以上の魚類が採集され、その採集データが標本データベースに入力された。画像データベースには合計513種、約45,000カットの生鮮時画像が保存された。

2011年度からは5カ年計画で、現地研究者の更なる能力向上、第一期事業の成果の発信、成果を活用した普及啓発活動等を目指した第二期事業を実施している。現在までの成果として、ベトナム・メコンデルタ域の魚類フィールドガイドブック、九州大学と共同で作成した東南アジア淡水魚類ウェブデータベース、自然環境研究センターに委託したメコン河流域に自生し住民に利用されている動植物の調査(「水辺の幸」調査)について報告する。

ベトナム・メコンデルタ域の魚類多様性調査として、2012年度地球環境基金の助成を得、ベトナム地方政府水産関係職員への魚類分類基礎知識に関する研修、メコンデルタ河口域での追加的魚類調査を実施し、カントー大学の協力を得て、第一期の調査結果を合わせてベトナムの魚類フィールドガイドブック(ベトナム語・英語併記。322種掲載)を作成した。

また、これまでの調査でメコン-チャオプラヤ河流域の魚類の標本及び分布に関する膨大なデータが蓄積されているが、紙媒体ではデータの発信に限界があることから、九州大学と協力して、収集した標本の採集地点情報、画像等をインターネット上で検索可能とするウェブデータベースを作成した。

さらに、自然環境研究センターに委託して、「水辺の幸」調査を実施した。前述したとおり、同地域の村落では現在も水田、河川など周辺環境に自生する生物(「水辺の幸」)に支えられた伝統的食生活を営んでいるが、近年の開発で自然環境が変化し、食生活も変化しつつあることから、科学的かつ文化史的観点から現状記録を行う必要があると考え、同調査を実施した。実地踏査により標本を収集するとともに住民にインタビューを行い、「水辺の幸」と見なされた動植物を生物学的に整理し、「水辺の幸図鑑(日本語版)」として取りまとめた。